

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊

うろおぼえ書評

—カツコイイ社会科学の三冊—

熊谷 聡

まずお断りしておきたいのは、この「書評」は、私の「うろおぼえ」によって行われるという点です。内容の正誤については、ご自身で必ず文献を読んでご確認いただきませうお願いします。私が学生時代に感銘を受けた本は貧乏で買えないので借りたし手元にならぬので読み返せない。なんといい加減な、と思われるかもしれませんが、本の真価は何年も経ってからも、どういう記憶として残っているかにあるという信念に基づく私的な企画ですのでお許しください。

幼少の頃より「ひみつシリーズ」や「ブルーバックス」で育った私は、車輪の上か下か真ん中か、みたいなきな名作文学を読んでも何の感銘も受けないタイプの学生でした。社会科学全般についても、「言葉

が成立するのかね」と、ちょっと斜めに見ていました。ところが、社会科学もカツコイイじゃないか！と感じさせてくれたのが以下の三冊です。

●つきあい方の科学

まず、R・アクセルロッドの「つきあい方の科学」。これ、邦題は全くカツコイイくないですが、原題は「The Evolution of Cooperation」という、一九八四年の本です。題名のとおり、足の引っ張り合いという世知辛い世の中で、誰に強制されるでもなく、人々の間に協力関係が生まれてくるメカニズムを明らかにしたゲーム理論の研究です。

著者は、有名な「囚人のジレンマ」ゲームを繰り返し行って、点数が高い戦略が勝ち、というトーナメントを主催するわけです。そ

こで勝利したのが、「Tit-for-Tat (TFT)」という戦略で、これは要するに「しっぺ返し」。相手が協力してくれるかぎりこちらも協力するが、相手が裏切ったら、次回はこちらも必ず裏切り返すというものです。

著者は二回のトーナメントで共にTFT戦略が優勝したことから、この戦略の強さは普遍的で、社会一般にあてはまる原則を含んでいると主張します。基本的に善良であること、やられたら報復する、戦略が簡潔で相手からも分かりやすい、などなど。

私がこの本にしびれたのは、抽象化されたゲームを使った実験から普遍的な原則を導き出し、それを現実社会にあてはめて幅広い事象について論評する、という鮮やかさでした。

ただし、その後、「TFT戦略

は言われているほど強くない」ということが、わりとあっさり判明するわけです。この本の分析の流れは、社会学者としての憧れでありつつも、同時に、どんなに明快で信じたくなくなる美しい論文も、科学である以上、間違いないならば正されねばならない、ということを学びました。あ、これは手元にありました。安かったですね。

●正義論

続いて、J・ロールズの「正義論」（一九七一年）。社会哲学、つてロック、カント、ヒュームのような歴史上の人物の言説だという先入観があつた私にとって、現代においてもそれが生きた学問である、ということを知るきっかけになった本です。また、「正義」という多様な価値観の権化のような概念を、論理的に記述している本書は衝撃でした。

まず、概念装置としての「無知のヴェール」。何が正義であるかについて人々の意見が異なるのは、人々が社会的に異なる立場に既に立っているからである。ならば、人々が自分がどのような社会的な立場に置かれるのか知らない

と仮定しても、なお選択される正義の概念こそが優れているのだ、ということ……だったと記憶しています。

そこから導き出されるのが、不平等が許容されるための二つの公準、「格差原理」と「機会均等原理」。格差は最も恵まれない人の厚生改善に資する場合にのみ許容される、不平等は全ての人に開かれた地位に付随するものでなくてはならない、というものです。

「正義論」、難しく分厚い本だったと記憶しています。今は、M・サンデル教授の「これから『正義』の話しよう」がありますから、そこから入って、社会学や政治思想について、おもしろいと感じた人は、「正義論」を読んでもると良いかもしれません。

●「アナーキー・国家・ユートピア」

最後は、R・ノージックの「アナーキー・国家・ユートピア」（一九七四年）です。当時の私は全く社会学について無知だったので、この本をアルバイト先の研究室で目にしたときの第一印象は、「キワモノに違いない。」何より、「ユートピア」という言葉が胡散

臭い。しかしこれ、リバタリアニズムの名著なわけですから、読んでみて「ユートピアの枠」という概念に衝撃を受けるわけです。

また、うろおぼえて大変恐縮なのですが、前述の「正義論」では、特定の基準を提示して、「正義」の定義を試みるわけですが、ノージックは、人それぞれ基準が違うんだから、そういう特定の定義によつて望ましい社会の姿つまり「ユートピア」は規定できない、というのです。唯一出来るのは、「ユートピアの枠」を設定すること、つまり、誰かが「俺の正義」を設定して、この指止まれ式に、それに賛同する人々が集まって社会を作る。その社会が気に入らない人は、別の社会に移動する。こうして支持を集めた社会は人数を増やし、そうでない社会は衰退する。複数の「ユートピアの枠」が併存し、その間を人々が移動できることのみ、「ユートピア」を実現することが出来る。そういう主旨だったと思います。

●言葉で学問をするということ

前述のように、私は「言葉でする学問」についてある種の偏見を

持っていたので、言葉で見事にロジックを組み立てているこれらの文献に、もの凄く驚いたし、感懐もしたわけです。「概念装置とか、思考実験とか、超カッコ良くないですか？」という。

考えてみれば、自然科学は、言葉では出来ません。厳密な数学や統計の世界です。言葉という道具を使って行うことができるのは社会科学だけ。駄作が限りなく生産される一方で、人類史上に残る名著もでるわけです。

しかし、言葉でなされたロジックの記述を追っていく作業は読む側に努力を要求します。世の中には、そうした努力を代行する解説書が多く出されていますから、そうした解説書の中でも良い物を選んで読むことで、短時間で幅広い文献の要旨は掴めるでしょう。

ただ、解説書は玉石混淆、迷ったらソースにあたれの原則通り、これは、と思う本は、外国語文献は、まずは訳書で良いので原文を通読することをおすすめします。特に学生さんは、情熱と時間があるうちに、原文と向き合うことで、得るものは大きいと思います。少なくとも、二〇年ぐらいたつても、うる覚えで内容を語れるぐらいの

何かは頭の中に残り、気がつけば自身の思考を支える柱となっているはずですよ。

（くまがい さとる／アジア経済研究所 経済統合研究グループ長「国際経済学（貿易）、マレーシア経済」

《参考文献》

●ロバート・アクセルロッド「一九九八」「つきあい方の科学―バクテリアから国際関係まで」ミネルヴァ書房。

●ジョン・ロールズ「二〇一〇」「正義論」紀伊国屋書店。

●マイケル・サンデル「二〇一一」「これから『正義』の話しよう」、早川書房。

●ロバート・ノージック「一九九五」「アナーキー・国家・ユートピア―国家の正当性とその限界」木鐸社。